

[319]

氏 名（本籍）	なる かわ よし お 生 川 善 雄（東 京 都）		
学 位 の 種 類	博 士（心身障害学）		
学 位 記 番 号	博 乙 第 2134 号		
学位授与年月日	平成 17 年 6 月 30 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	知的障害者に対する健常者の態度構造とその因果分析		
主 査	筑波大学教授	博士（心身障害学）	前 川 久 男
副 査	筑波大学教授	教育学博士	河 内 清 彦
副 査	筑波大学教授	医学博士	宮 本 信 也
副 査	筑波大学助教授	教育学博士	桜 井 茂 男

論 文 の 内 容 の 要 旨

1. 問題と目的

知的障害者の社会参加を円滑に進めていくためには、彼ら自身の努力、関係者の努力に加えて、知的障害者に対する社会の人々の理解も重要となってくるだろう。社会の人々の理解を高めるためには、一般社会の人々の知的障害者に対する態度がどのようなものか明らかにし、またどのような要因が影響しているのかあきらかにする必要がある。わが国においては、知的障害者に対する態度研究は、散発的に行われた研究が多く、また、多次元的な検討も少ししかなされてはいない。このような点を考慮して、知的障害者に対する一般社会の人々の態度構造と様々な要因との関連を明らかにすることを目的とした。

2. 知的障害者に対する態度調査項目の分析

まず、態度調査項目の分析を通して、性、接触経験、ボランティア経験などが、知的障害児（者）に対する態度にどのように影響を及ぼすかについて検討した。

その結果、総論的な質問内容の項目について男女差は見られなかった。他方、知的障害者が困っていれば、世話をしたり、助けてあげたいと思うか、というような自己との関わりがより明らかな各論的な質問内容の項目には、男性よりも女性の方がより好意的な回答を示していた。同様に、総論的な内容の質問項目については無接触群、接触群、ボランティア群の3群とも好意的で、差は見られなかった。しかし、知的障害児（者）との直接的な関わりを尋ねた質問内容においては、接触経験もボランティア経験も無い女子大生の場合に、非好意的となっていた。他方、ボランティア経験を有する女子大生の場合には、知的障害児（者）との具体的関わりについて尋ねた質問に対しても好意的回答を示す者が多かった。

3. 知的障害者に対する態度の多次元的分析

次に、探索的因子分析を適用し、多次元的な観点から、知的障害者に対する態度構造について分析検討した。さらに、因子分析の結果に基づき、態度を測定するための内的一貫性のある信頼度の高い尺度を開発し

た。そして、開発した尺度を用いて、性・知識・接触経験・専攻などと知的障害者に対する各態度次元との関連性について検討を行った。

その結果、高校生から40歳代の一般成人、教員、保育・幼児教育・社会福祉を学んでいる女子短大生、一般大学生などを対象として態度調査を行い、知的障害者に対する彼らの態度構造について多次元的に分析を行った。そして、「実践的好意」「理念的好意」「能力肯定」「地域交流同意」「統合教育同意」「社会参加同意」などの因子を抽出し、各因子と性、接触経験、知識、専攻などとの関連性を検討した。その結果、概して、女性は男性に比べて、知的障害者に対して好意的であった。接触経験との関連で見ると、知的障害者との接触経験がある人は、「実践的好意」、「地域交流同意」などの尺度得点が高かった。知的障害の出現に関する知識との関連で見ると、知識の無い人に比べて有る人の方が「実践的好意」度が高く、「地域交流」にも積極的であり、また「理念的好意」度も高かった。大学生の専攻との関連で見ると、「実践的好意」、「理念的好意」については一般学生の男子が女子に比べて低得点であった。また、一般学生の女子は福祉専攻学生の男女と同様に高得点であった。「社会参加同意」に関しては、福祉専攻学生は男女ともに一般学生よりも得点が高かった。

以上より、知的障害児（者）に対する態度と知識の有無や接触経験の有無とが関係があるといっても、どのような次元かということが問題となってくることがわかる。

4. 知的障害者に対する態度の因果分析

さらに、知的障害者に対する態度調査のデータに探索的因子分析を用いて抽出した因子間の因果関係について、共分散構造分析を用いて検討した。そして、小学生時代の統合教育の経験、小中学生時代における知的障害児との接触経験・家族で知的障害問題を話題にした経験などが、知的障害者に対する態度に関する因子（潜在変数）にどのように影響を及ぼしているのかについて検討を行った。

その結果、「地域交流同意」「能力肯定」「社会参加同意」などに関する態度は、直接的に「実践的好意」に影響を及ぼしているのではなく、「理念的好意」を介して「実践的好意」に間接的に影響を及ぼしていることが明らかとなった。すなわち、知的障害者の地域交流や社会参加に同意したり、知的障害者の能力を肯定したりすることを通して、知的障害者に対する理念的・観念的次元の好意度を高めることが、具体的・現実的次元における好意度を高めることにつながっていく、と予測することができる。

次に、小学生時代の統合教育の経験、小中学生時代における知的障害児との接触経験・家族で知的障害問題を話題にした経験、などが知的障害者に対する態度に関する因子（潜在変数）にどのように影響を及ぼしているのかについて検討を行った。

小中学生時代の種々の経験が「能力肯定」、「統合教育同意」、「理念的好意」、「実践的好意」、「実践行動」などに影響を及ぼしていることが明らかとなった。すなわち、「小学接触」は「能力肯定」に少しの、また、「実践的好意」にいくつかの影響を、そして、「家族話題」は「実践行動」に比較的大きな、「理念的好意」へは少しの影響を与えていた。

しかし、「能力肯定」は「小学接触」から小さい影響を受けているのみであった。また、「小学統合」、「中学接触」から他の潜在変数へのパス係数を見ると好意的な態度形成に大きく影響しているとはいえなかった。

今後、「能力肯定」や「統合教育同意」、「抵抗感」、「理念的好意」などに強く影響を及ぼしている要因について、さらに、検討していくことが必要である。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、知的障害者に対する健常者の態度構造を測定する態度尺度を構成し、多くの人口統計学的要因や障害者に関わる交流経験等の要因から分析し、共分散構造分析により様々な要因の因果関係を示すことにより、健常者の態度形成に関連する多様な要因の関係を明らかにし、一般社会の知的障害者に対する態度の変容に示唆を得ることを目的とした論文である。結果として、義務教育段階での知的障害者との単なる接触経験は必ずしも大きな影響を与えるとは言えず、家族での話題などより広い経験を通じて実践行動や、理念的好意に影響を与えることが明らかになった。これらの知見は、教育においては単に場面として同じ場にいるだけでは十分ではなく、より積極的な経験をそれらの場において経験していくことが求められており、それらを通じて知的障害者の能力を肯定し、地域でのインクルージョンを積極的に受け入れていく態度の形成につながることを示している。よって本論文は、さらに「能力肯定」や「統合教育同意」、「抵抗感」、「理念的好意」などに強く影響を及ぼしている要因について検討していく明らかにしていく必要はあるものの、一定の知見を得たものとして価値あるものとする。

よって、著者は博士（心身障害学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。